



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

（第一四二号）

立冬

十一月七日

安井算哲と神宮

私たちの暮らしの元となる暦が、今、注目されています。沖方 丁著の『天
地明察』がベストセラーとなり、映画化されました。その主人公、安井算哲
は江戸時代、日本独自の暦を初めて作成し、八〇〇年ぶりの改暦事業が行わ
れたのです。貞享元年（一六八四）に改暦したことから貞享暦と呼ばれます。

それまで日本は、平安時代初期から使っていた宣明暦でしたが、中国の都
を基準に作成しているため、日本とは経度による誤差が生じていました。そ
こで、和算にたけた碁打ち、算哲が改暦に取り組むのです。

算哲は毎晩、星空を観察します。特に動かない北極星を全国各地で計測す
るのが映画では印象的に描かれています。暦を作るとは、星を観察すること
であったのです。

先日、神宮徴古館でその実力を目の当たりにしました。算哲作の天球儀が
展示されていたのです。厚紙を貼り固めた直径三三センチあまりの球体は白
色顔料の胡粉で塗られ、そこにおびただしい数の星が記されています。その
数、一四六一個。現代の天球儀にひけをとりません。ただし、星座名がギリ
シャ神話にもとづくものではなく、中国名になっているのが時代を物語りま
す。この天球儀は、改暦の一五年後の元禄一年に算哲自身が伊勢参りをし
た際、神宮に奉献したものです。算哲が師事した山崎闇齋は儒学者であり、
後に垂加神道を興した人物。闇齋から神道を学んでいた算哲は敬神の念が篤
かったといえます。長年の研究が成就し、新暦を生み出した算哲は、神前で
その偉業を奉告し、感謝したことでしょう。その喜びが伝わってくるように
思いました。算哲はその後、自作の地球儀を神宮に奉献。これも日本人の手
による初のものでした。現在、神宮徴古館で展示されています。

文 千種清美

